

保育園児の社会的成熟度

について

名古屋市保育短期大学

甲斐久生
宇井淑子

一、研究目的

幼児の社会的成熟は、幾多の経験を重ねる事に依って幼児の心性の特徴である自己中心性が解消せられ、活発に展開する萌芽の時期にある。体験する経験は幼児夫々に依って異なる様に社会的な成熟に於いても個々の幼児によって異なる。この個々に於ける発達の様相をとらえ適切な指導をするには、標準的な一定の基準が必要であり、この基準にしたがって発達段階を知る事が出来ると思う。その発達が社会的成熟である事から幼児の生活場面である地域社会を無視する事は出来ない。従ってその地域に於ける発達基準が必要とせられる訳で、知能テストの如く一般化せられていないところから、名古屋市に於ける幼児の社会的成熟尺度の作製を試みた。

二、研究方法

研究対象としては、名古屋市に於ける保育園児二九〇名をとった。表一がそれである。名古屋市を住宅地域、商業地域、工業地域の三つに層別し、一地域に於いて三又は四保育園を選び、その一つ

表 1

	住	商	工	計
4才	25	20	22	67
5才	35	35	35	105
6才	42	40	36	118
計	102	95	93	290

の保育園から平均五〇名をとった。

尺度の作製には、牛島義友先生の社会的生活能力検査、ドルの *Social maturity scale* 等を参考とした。選出した問題は、四〇項目ありこれをドルの尺度と同じ様に SHD、SHE、SHG、SD、C、S、O、L の八つに分類した。この作製した尺度を持つて、質問紙を作り幼児の行動評価を各家庭に於いてしてもらった。出来るものには○印をつけ出来ないものには×印をつける事とした。

調査の期間は昭和二九年二月二〇日から昭和三〇年一月二六日までである。

三、研究結果

四〇項目について合格率を検討し、尺度として不適當と思われる問題を除外し別表の如き二五項目をもって社会的成熟尺度とした。

この尺度に依って出来る問題には一点を与え、出来ない問題を無点として個人の得点を出し、年令別、性別、地域別に相違を見てみた。表二、表三はそれである。

年令的な発達をグラフに書くと図一の様である。

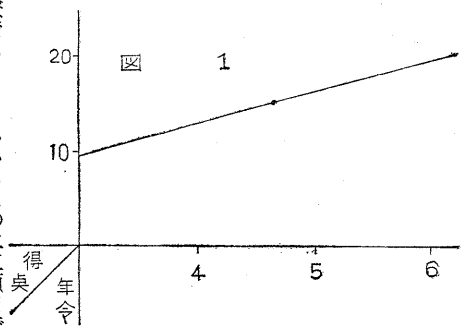
年令的発達是一直線で表わされている。この場合の年令は平均年令あり、四才は四才八ヶ月、五才は五才七ヶ月、六才は六才四ヶ月となっている。以上尺度の作製をし色々な結果を得たが、これ等をまとめて見ると次の様である。

表 2 (平均値)

地域 \ 性	4 才			5 才			6 才			全 体		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
住宅	15.4	15.7	15.5	18.7	19.4	19.1	19.9	22.2	21.0	19.9	22.5	19.0
商業	15.8	14.0	14.7	18.1	18.7	18.4	18.7	21.0	20.1	17.2	18.7	18.3
工業	15.1	14.7	14.8	16.5	17.7	17.0	19.6	21.3	20.4	16.8	17.6	17.3
計	15.2	14.8	15.0	17.6	17.7	18.2	19.2	22.0	20.5	17.7	19.1	18.4

表 3 (標準偏差値)

地域 \ 性	4 才			5 才			6 才			全 体		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
住宅	4.4	2.7	3.8	3.1	3.7	3.4	3.8	2.5	3.5	4.3	1.9	4.1
商業	3.9	2.5	3.5	3.1	3.2	3.2	2.0	2.5	2.6	3.3	3.7	3.6
工業	1.8	3.6	3.3	3.7	3.3	3.6	4.1	2.8	3.6	3.6	4.0	4.2
計	3.7	3.2	3.6	3.5	3.6	3.5	3.6	2.1	3.3	3.9	4.0	4.0



際であるところからこの二五項目でもって社会的成熟尺度とする事が出来ると思う。

対象児はほんの少しではあるが、一応標準的な基準として考えてもよいのではないかと思う。今後はこの尺度と幼児の家庭環境について知らべて見たいと思っている。

参 考 文 献

- 一、牛島義友 社会的生活能力検査・二、児童研究会 児童と社会生活
- 三、守屋光雄 幼稚園児・四、児童と精神衛生の中心 幼児の社会的成熟に関する研究

社会的成熟尺度

一、箸でこまかい豆をつかむ。

- 一、社会的態度の交流(C)の発達は年令的な発達
の差が大きい。
- 二、女子は爪を切る、魚を
むしる、紐を結ぶ等手
先きの細い仕事に対す
る成熟が早い。
- 三、男子は保育園へ独りで
行くでみられる独立的
行動に於ける成熟が女
子より早い。
- 四、年令的な発達段階が明

幼児の自由画と生活感情

—幼稚園における所見に基いて—

西南学院短期大学児童教育科

高橋 さや か

- 二、鉛筆やクレヨンで描画する。
- 三、魚などむしって食べる。
- 四、欲しいものがあっても後でと言うことがわかる。
- 五、保育園へ一人でいける。
- 六、順番をおとなしく待つことが出来る。
- 七、お金を持って使いに行ける。
- 八、手伝ってもらわずに床につく。
- 九、毎朝顔を洗う。
- 一〇、スキップができる。
- 一一、鋏で形を切り抜くことができる。
- 一二、こぼしたり、ひっくりかえしたりしないで食べる。
- 一三、自分の経験を話す。
- 一四、ことづけをまちがいなく伝える事が出来る。
- 一五、双六やカルタができる。
- 一六、人の前で歌ったりおどったりする。
- 一七、歯をみがく。
- 一八、ひとりで風呂にはいる。
- 一九、保育園へ行く時自分の持物をひとりで用意する。
- 二〇、ひとりで衣服がきれえる。
- 二一、厚紙がきれえる。
- 二二、小さなけがなら自分でくすりをつける。
- 二三、紐をかた結びにする事が出来る。
- 二四、自分の名前を正しくかなで書く。
- 二五、片手なら自分で爪をきる。

《序言》

幼児の自由画、生活感情と密接な関係をもつことは既に多くの例があげられ、改めて言うまでもないことのように思われる。しかし現在の状態では、少くとも、施設における保育生活の中で描かれた「自由画」がどの程度に真に幼児自身の生活感情を表現しているものであるが、俄かにはきめ難いといわねばならないのではないかと思う。施設の保育担当者が、子どもを十分に尊重し、自発活動を熱心に誘導しているにしても、子どもの造型活動は常に純粹に自己の全部に忠実であるとは限らない。

ここに試みた考察は、一九五四年度の西南短大児童教育科附属舞鶴幼稚園の園児のうちから、五―六才（最年長組）児七〇名、四―五歳児四〇名について、一年間の観察をまとめたものである。考察の対象にしたものは描画時の観察ノートと、子どもの作品とであるが、作品は、所謂「しごとの時間」―規程保育のプログラムの中の時間にかかせたものと、自由遊びの時間中に子どもが望んで自分か